

Title	中世英文学に於ける女性像
Sub Title	Medieval English literature
Author	安東, 伸介(Ando, Shinsuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.19, (1965. 1) ,p.36- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 文学・芸術に現われたる女性像
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00190001-0036

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中世英文学に於ける女性像

安 東 伸 介

I

「中世英文学に於ける女性像」という与えられた題目は極めて広汎多岐に亘る問題を含むものであり、限られた紙面内で、その全貌を眺め渡し、あらゆる問題に論及することは不可能である。中世英文学という場合、もとよりそれはOE(古英語)及びME(中英語)で書かれた文学の両者を指し示すものであるが、Oの文学、即ちアングロ・サクソンの英雄詩や抒情詩に於て、女性というものが主要な主題ではなかったことについては、こゝに改めて言うまでもないことであろう。女性が文学の最も重要な主題の一つとして取上げられるようになったのは、MEの時代に至ってからのことであり、従って本論の対象はMEの文学に限定されることを先ず明らかにしておかねばならぬ。そして、更にこの小論に於ては、MEの文学の中から十三世紀以降の世俗的抒情詩(secular lyrics)やチョーサーの作品などを中心に選び、それと関連の深い周辺の作品に論及しつゝ、中世に於ける最も典型的な女性像、特に中世の美女の理想像の現われについて考察するにとどめたいと思う。

英文学に限らず、一般に中世のヨーロッパ文学に見られる女性描写の特徴は、それが或る一定の伝統形式ともいうべきものに従って行われていたということであろう。エドモン・ファラルは『十二世紀及び十三世紀に於ける詩法』に於て、中世文学に見られる女性描写の実例から帰納的に、この伝統形式の定則を提示している。¹ 中世の詩人は、通常、一定の順序に従って女性（或いは人間一般）の外見を描写して行く。即ち、人相については、髪、額、眉、眉間、眼、頬、鼻、口（唇）、歯、顎、の順に、更にまた肉体については、首（頭）、頸、肩、腕、手、胸、胴、腹、脚、足、の順に、それぞれの特徴を叙述して行くのである。詩人は描写の対象によって、色彩、形状、匂い、味、感触などを記述する。勿論、中世のあらゆる女性描写が右に列挙した事項のすべてについてもれなく語るといふのでは決してなく、また、その描写の順序も厳密に右の通り一定しているというわけではないが、総じて人体の上部から下部へ、即ち造物主たる神（或いはその代理者としての自然）が頭から足へと人間を創造して行った順序に従って、行われるというのが原則であった。中世ヨーロッパ文学に見られる女性描写は、まことによくこの定則に従っており、こゝにもまた中世ヨーロッパに於ける「文化的統一性」を明瞭に窺うことが出来るのである。

こうした修辞上の伝統は、ギリシア末期及び古典ラテンの文学にその萌芽を持ち、それが中世ラテンの詩人を経て、ヨーロッパ各国語の文学（*vernacular literature*）に伝えられ、次第に中世独特の形式に完成されて行ったものであるが、この形式による女性描写の中世最古の例（韻文）として、ファラルはマクシミリアヌス Maximianus の「哀歌」(L. II, 93 ff.) を挙げている。²

*Aurea caesaries demissaque lactea cervix/Vulvibus ingenius visu sedere magis./Nigra supercilia, frons libera, lumina clara/Vrephant
animum saepe notata meum./Flammae dilexi modicumque tumentia labra./Quae gustata mihi basia plena darent.*

こゝに見られる描写の順序は、明らかに既述の原則を示すものであろう。然し、こゝで特に注目すべきことは「金色の髪」「ミルクのように白い頸」「黒い眉」「ひろい額」「澄んだ眼差」「ほどよく（僅かに）盛上った唇」といった描写が、中世ヨーロッパ文学に於ける美女の典型ともいふべきものを示しているということである。しかもこの美女像は、英文学について見れば、中世を超えて更にエリザ

ベス朝文学に至るまで、美女の理想像として登場して来るものなのである。マクシミアヌスの描いた女性は、言わば中世からルネサンスに至る文学に於ける理想的美女の原型を示すものであったと言い得よう。⁴

中世文学の詩法上の規範を確立した修辞学者たち、即ちマチウ・ド・ヴァンドーム Mathew de Vendôme やジェフロア・ド・ヴィンサウフ Geoffroi de Vinsauf に見られる女性描写も明らかに伝統形式に依るものであった。マチウの『詩法』*Ars Versificatoria* に見られるトロイのヘレンの像は、「金色の髪」「紙のように白い額」「黒く細い眉」「星のような眼」「ほどよい大きさの鼻」「象牙のような(白い)歯」「蜜の味のする、小さな、僅かに盛上った唇」「バラの香りの口」「なめらかな頸」等々の描写によって表現されている。ジェフロアの『新詩字』*Poetria Nova* の女性描写もマチウのそれと本質的に変わらず「金色の髪」「黒い眉」「色白の肌」等々、常套の表現による描写である。また、マチウもジェフロアも共に美女の描写に際して、先ず美女の創造者たる自然への言及からはじめている。美女を自然の創造によるものであるとする考え方は、中世独特の伝統的な発想であった。美しい女性を自然との関連に於て描き讚美する形式も、中世に於ける、美女描写の常套的形式であったと言うことが出来る。チヨースーの作品にもこの例は極めて多いのである。⁷

マチウやジェフロアの方法が、修辞上の規範として、中世のヨーロッパ文学全体に甚大な影響を及ぼしたことは、既に文学史の定説として周知の通りである。女性描写の例一つを見ても、二人の方法は中世文学全般に共通する伝統形式を示している。チヨースーがジェフロアの詩法を学んだということは、チヨースー自身の言から充分に想像されるところである。後に述べられるように、チヨースーの女性描写にもこうした伝統形式が守られているし、放浪の学僧たちの歌(『カルミナ・ブラーナ』*Carmina Burana* など)や、また『薔薇物語』にも勿論、この形式による美女描写の例を発見することは容易である。

『薔薇物語』は言うまでもなくチヨースーととりわけ深い関係を持ち、ギヨーム・ド・ロリス Guillaume de Lorris による部分はチヨースーによって英訳されているが、この作品に見られる女性——アレゴリーとしての人物——もまた伝統形式によって描写されている。いくつかのアレゴリーの描写を比較して見ると、殆んどそこに本質的な差異は認められず、ギヨームが美女の理想像の定型に従って筆をすくめていることが明らかに看取されるのである。例えば「怠惰」も「美」も「歎喜」も、要するに、中世の美女の理想概念に基づいて示されているのに他ならない。換言すれば、『薔薇物語』に於けるアレゴリーの描写から、中世一般の美女の理想概念を帰納

的に抽出することが可能なのである。今、右に挙げた三つのアレゴリーの描写から、キョームの描く美女の像を考えて見ると、髪は黄色（金髪と同系統）、眉は髪の色と対照的に色濃く、眼は灰色で、口は小さく、顎は割れて、顔色は白く薔薇色の赤味がさし、肉柔らかく、胴細く、といった姿が浮かんで来る。マチウやジョフロアに共通の美意識を窺うことが可能であらう。

放浪学僧の歌に見られる女性描写からも、全く同様に、中世の美女の理想概念を帰納的に抽出することが可能である。ここに讚美される女性たちの像も、結局、中世の美女の典型を示すものに他ならぬ。金髪、色白、細腰云々の、『薔薇物語』に見られるものと全く等しい美女の姿が現われて来るのである。¹⁰

註

- 1 E. Faral, *Les arts poetiques du XII^e et XIII^e siècle*, pp. 79 ff.
- 2 D. S. Brewer, "The Ideal of Feminine Beauty in Medieval Literature, Especially 'Harley Lyrics', Chaucer, and some Elizabethans, *MLR*, Vol. I, No. 3, 1955, p. 257; W. T. H. Jackson, *The Literature of the Middle Ages*, ch. 8.
- 3 E. Faral, *op. cit.*, p. 80.
- 4 D. S. Brewer, *op. cit.*, p. 269.
- 5 *Ars Versificatoria*, I, 56, 57 (Faral, *op. cit.*, pp. 129—30).
- 6 *Poestria Nova*, II, 554 ff. (Faral, *op. cit.*, pp. 214—5).
- 7 拙稿『チモースに於けるNatureの問題』（「西脇順三郎先生記念論文集」昭和三十八年一月、芸文学会発行、二四七—二五八頁）参照。
- 8 *Nun's Priest Tale, Canterbury Tales*, VII, 3347.
- 9 J. A. Symonds (ed. and trans.), *Wine, Women, and Song*, 1884 所載の放浪学僧の歌から、本論に関連のあるものとして 14, 19, 32, 34, 39 など挙げられている。 (数字は Symonds の編集番号を示す。)
- 10 cf. E. R. Curtius, *European Literature and the Latin Middle Ages* (trans. by W. R. Trask), P. 510. ここで記されたロマンスの女性美の理想は、中世ヨーロッパのそれと極めて近きものを示している。

II

中世英文学に於て、こうした女性描写の定型が見られる例としては、先ず、宮廷風恋愛を主題とする十三世紀以降の世俗的抒情詩を

挙げなければならぬ。¹

ハーレイ写本二二五三 (MS. Harley 2253) 所載の『アリスーン』*Alisoun* の一部を例として掲げる。²

On heu hire her is fayr ynoh,

(大意) 彼女の髪は黄金色^{こがね}。

hire browe brow, hire ege blake,

眉は茶色で、眼は黒い。

Wip lossun chere he on me lof.

可愛い瞳で私に微笑む。

wip middel smal & wel ymake.

腰はほっそり形良い。

(ll.13—16).

Hire swyre is whitter pen pe swon,

頸は白鳥より白く、

& feyrest may in toune.

町一番の縹緞よし。

(ll.27—28).

ここに見られるアリスーンの像は、金髪、細腰 (middel smal)、茶色の眉、色白、という典型的な中世の美女としての条件を備えている。たゞ「黒い眼」という描写は稀な例で、眼は、既に『薔薇物語』に見られたように灰色が普通であった。頸の白さというのは既にマクシミアヌスに見られた通りである。マクシミアヌスはそれを「ミルク」の白さに喩えているが、『アリスーン』では「白鳥」が比喻に用いられている。この種の比喻も、大体に於て、常套的なものを用いるのが普通であった。例えば頬や唇の赤には「薔薇の花」が、肌の白さには「百合の花」が、最も頻用される比喻であり、明らかに修辞上のクリシエとなっていたように思われる。放浪僧の歌や、MEの抒情詩のみを見ても、そうした例は枚挙に暇がないのである。同じくハーレイ写本・二二五三所載の『絶世の美女』*The Loveliest Lady in the World* は『アリスーン』よりも遙かに長く、また、定型の好例を示す作であるが、頬の輝きを「夜の燈籠」(a launterne a-ngh) に比してゐる (C. Brown, 83, l. 22)³。これは比喻としては稀なものの一つであろう。³ 英国中世の世俗的抒情詩

に見られる女性像も、本質的に、中世ヨーロッパ文学全般に共通する理想的女性像と変るものではない。詩人たちは、美女のあるべき普遍的な理想像に依って特定の女性を讃えているのであって、決して特定の女性の持つ個性的な美や特質をリアスティックに描き出しているのではない。それはいわば「宮廷風恋愛」の、一つの様式化された女性讃美と見るべきものであり、万一、相手の女性が美女の理想像からはずれた存在であっても、これら中世の抒情詩人たちの手にかゝれば、たちまち型の如く絶世の美人として描かれ讃美されるのである。だが然し、それは決して「あはたもえくぼ」という可憐な事情によるものではなく、中世の抒情詩人にとっては、レトリックの伝統というものが極めて重要な意味を持っていたのであり、現実に見たまゝの女性ではなく、想像の内に生きている理想の美女を伝統の形式に於て描くことによって、憧憬の恋人を讃美しようとしたのである。こうした恋愛抒情詩に、殆んどステロタイプとして確立された美女像を見ると、我々はそこに、中世に於ける *aesthetics* の一端を窺い知ることが出来るように思う。

現実の女性が、恋愛詩に現われる理想の美女のように美しくありたいと切望し、化粧に憂身をやつす者のあつたであろうことは容易に推察される。色白く見せるためには白粉が用いられたであろうし、髪は金髪に染めることが考えられたであろう。先に言及した『薔薇物語』のアレゴリー「美」の描写はチョーサーの英訳に含まれているが、ギョーム・ド・ロリスの原文にはなく、翻譯者たるチョーサーが挿入したと思われるものに *'No wyndred browis hadde she'* (I. 1018) の一行がある。中世の美女の理想像として、眉は、金髪とは対照的に、くっきりと色濃いものであると同時に、眉間の切れていることが大事な条件であった。ギリシア時代には、左右の眉の連続していることが美女の条件とされたという。⁵ 従って「彼女は眉を刈らなかつた」というチョーサー自身の挿入行は、「美」が、中世の美女の条件に適うよう、眉間の毛をわざ／＼刈りとって美人になりましたのではなく、正真正銘の美女であつたということをし、特に力説しているものと解釈すべきであろう。『トロイルスとクリセイデ』では、美女クリセイデの眉のつながっていたことが、玉に瑕として言及されている (V. II. 813-4)。また『カンタベリ物語』*The Canterbury Tales* 中のファブリオ『粉屋の話』*The Miller's Tale* には、大工の女房でアリスーンという名の、色好みの女が登場するが、チョーサーは、彼女が眉毛を抜いて左右の眉の形を小さく整えていたことを言っている (I. 3245)。つまり、アリスーンは天性の美女ではなく、言わば作りものの美女だつたということにならう。チョーサーのこのアイロニーは、中世の美女の理想的典型や女性描写の定型を知った上で、初めて笑いを誘う

ものである。このアリスーンの描写は、次章に於ても述べるように、宮廷風恋愛詩のパロディともいうべきものであった。

既に指摘したように、世俗的抒情詩に見られる女性描写に、近代的な意味に於けるリアリズムを求めることは無意味である。マクンミアースの描いた女性の美に本質的に帰着する美女の像が、比喻や形容に若干の変化を見せながら、くり返しく歌われているのである。一般に中世の抒情詩に於ては、主題の多様性や感情の真实性よりも、技巧の洗練やメロディの美が一層重要と考えられているのであり、女性讚美という主題にしても、詩語の洗練や韻律の彫琢を志しつゝ、あくまでも様式の枠をふみこえることなく、伝統的な美女の理想概念に表現を与えようとしているのである。この事情はチャーサーのような「リアリスト」にとっても変らぬものであったように思われる。

註

- 1 筆者が知り得た限りの、本論に関連ある世俗的抒情詩を列挙する。(数字はそれ々のテキストの編集番号を示す。) C. Brown (ed.) *English Lyrics of the Thirteenth Century*, 76, 77, 78, 83; R. H. Robbins (ed.), *Secular Lyrics of the XIVth and XVth Centuries*, 127, 128, 129, 130, 131, 143, 184, 208, 209, 210, 211, 209 及び 209 年宮廷風恋愛詩の「ロナイとふじうとくもの」前者は醜男、後者は醜女を描く。
(*MS. Harley 2253* 所載の 'The Fair Maid of Ribblesdale' は本論の主題として極めて重要な作品であるが、残念ながら C. Brown 編のテキストには割愛されている。cf. D. S. Brewer, *op. cit.* pp. 260 ff.)
- 2 C. Brown, *op. cit.*, 77.
- 3 伝統的な比喻の用法については更に詳論する必要があるが、紙面に余裕がなく、別の機会を待ちたい。
- 4 cf. Edith Rickert, *Chaucer's World*, pp. 341-2.
- 5 D. S. Brewer, *op. cit.*, p. 257.
- 6 W. T. H. Jackson, *op. cit.*, p. 275.

III

チャーサーの作品中、伝統形式による女性描写が見られるものとしては、先ず『公爵夫人の書』*The Book of the Duchess* を挙げなければならぬ。これはチャーサーのパトロンであったランカスター公、ジョン・オウ・ゴント John of Gaunt が、一三六九年黒死病

のため死去した妃ブランシュ夫人追悼のために、チヨースーに命じて作らせたエレジイである。宮廷風恋愛を基調とするこの作品は、チヨースーの処女作といふべきものであるが、その八一六行より一〇四一行まで、二百二十五行に亘り、高貴の女性ブランシュ夫人の像が最高の敬愛と讚美を以て描き出されている。このブランシュ夫人の描写は十四世紀のフランス詩人マシヨール *Machaut* の *Jugement dou Roy de Behaigne* に基づくものであり、¹ 典型的な美女描写の様式に従っている。ここに描かれたブランシュ夫人の像には、現実の夫人の姿を描いた点もあることは充分想像されるが、チヨースーは決してリアリストの眼を以て夫人を描いたのではない。限られた紙面で、チヨースーの描写の一つ一つについて述べる余裕はないが、これまでに管見された問題に関連の深い点をいくつか選んで見ることにしたい。ブランシュ夫人の美德と優雅な姿を次々に描いて行くチヨースーの筆致は、修辭の精緻を極めて、世俗的抒情詩に見られる如き単純素朴なものは決してないこと、またマシヨールの原本に比べてチヨースーのスタイルが如何に優れた独創的詩才を示しているかについて論ずることも、無論重要な問題ではあるが、こゝではたゞ女性美の伝統的理想がチヨースーに於てもまた明瞭に生きている事実に注目したいと思つのである。

例えば髪は、こゝでもまた金色であるが、*"hyt was not red/Ne nouther yelow, ne brown hyt nas/Ne thought most lyk gold hyt was."* (II 856—8) へそれは赤でもなく、黄色でも茶色でもなく、私には一番金に似ていると思われたく」と描写されている。前章に引用された抒情詩『アリスーン』に比べて描写はずゞと複雑である。眼の描写についても同じことが言えよう。*"Debonaire, goode, glade, and saddle./Simple, of good nochel, nocht to wyde./Therto hir look nas not asyde/Ne overlwert, but beset so wel"* (II 860—3) へ(眼は)優しく、形とゞのい、欲びに輝き、しつかと動かさず、汚れなく、大きさはとゞよく、開き過ぎず、また眼差は、脇眼横眼のたぐいに非ず、しかと定まる」といふ風に描かれている。眼差が真直であるということは、単なる眼の外見描写ではなく、その人の徳性の現われとして語られているのである。チヨースーのブランシュ夫人の描写は、このように外見上の風姿の美と共に徳性の美をあわせて描いて行くところに特徴が見られる。勿論、世俗的抒情詩の女性讚美も、単に女性の肉体的外見を描くだけでなく、その美德をも讚えている。讚美の対象たる高貴の婦人の外面の美は内面の美德と一致しているのが常であり、宮廷風恋愛詩に於ては「外面如菩薩内面如夜叉」という女性の型は現われない。中世に於ける女性の徳の最大なるものは「慈愛」「憐れみの心」であったと言つてよいであらう。

ブランシュ夫人もまたこの最高の徳を備えていた。ほかならぬ彼女の眼がそれを示していたとチョーサーは言っている (II. 867-8)。
ブランシュ夫人の描写には、定型通り、髪、眼、頸、肩、腕、手、爪、乳房、尻、背中、などへの言及が見られるが (額、眉、鼻、口、歯、顎、股、脚、足、肉への感觸) などは描写無し)、これらの肉体的部分の描写は、髪や眼を別として、極めて簡単に片づけて、むしろ内面的な徳を讃えることに力を入れ、多くの行を当てゝゝる。チョーサーはたゞ単にレトリックの伝統に固執するのではなく、定型に従いながらも旧套の枠を破り、定型そのものに新しい生命を注ぎ込んでいるのである。極めて中世的でありながら、しかも常に何か中世を超えたものを示現するという特質は、いわばチョーサーという詩人の本質を示すものであろう。然し、ブランシュ夫人の像が結局中世の伝統的な美女理想に合致するものであり、それが現実の夫人像の純粹にリアステイクな描写ではないという事実は否定できぬ。却って我々は、チョーサーが伝統的な美女像に依ってブランシュ夫人を理想化したところに、彼の夫人に対する崇敬と讚美の並々ならぬ深さを窺い知るべきであらう。

『トロイルスとクリセイデ』に於けるクリセイデの描写にもまた、レトリックの伝統形式に依拠した例を見ることが出来る (c. 3. II. 1247-50; V. II. 806-19)。『カントベリ物語』にも定型に依る女性描写が散見されるが、こゝでは前章でふれた『粉屋の話』のアリスーンの場合を取上げたい。アリスーンの描写 (II. 3233-70) は美女描写の定型に従いながら、いかにもフアブリオに相応しく、いわば宮廷風恋愛詩の見事なパロディになっているのである。彼女の身体はほっそりと優美で、色艶は光り輝き、という調子で、いかにも宮廷風恋愛詩に讃えられる高貴の美女さながらの姿であるが、すんなりした身の細さはイタチに、色艶の輝きは出来たてのノウブル金貨 (六シリング八ペンス相当) に喩えられている。宮廷風恋愛詩では輝やく星に喩えらるべき眼も、アリスーンの場合は淫奔 (licentious) と形容される。また、歌や舞踏のたしなみは貴婦人の欠くべからざる条件であったが、アリスーンは、歌声は燕のようにかん高く、舞踏の代りに、仔山羊や仔牛のように飛んだりねたりすることの上手な女として描かれている。もとゞ美しい貴婦人を讚美するため
の宮廷風恋愛詩の形式によって、田舎大工の若い女房を描いたというところにこのパロディの可笑しさがあり、中世恋愛詩の伝統に通曉していた宮廷人たちは、チョーサーのこの物語の秀抜な描写を聴いて抱腹絶倒したに相違ないのである。前章で言及したハーレイ写本・二二五三所載の抒情詩に讃えられた美女アリスーンの名を、チョーサーが大工の女房に与えているのも意図的な皮肉のように思わ

れる。³ この種のパロディは世俗的抒情詩にも例を見ることが出来る（例えば 'The Lover's Mocking Reply', R. H. Robbins (ed.), *Secular Lyrics of the XIVth and XVth Centuries*, 209)。これは世にも稀なる醜女を宮廷風恋愛詩の形式によって歌ったもので、チョーサーの作品に比べれば遙かに悪趣味でふざけたものではあるが、中世に於ける、讚美とは裏腹の、女性に対する無遠慮なシニシズムを窺わせるに足る作品である。『公爵夫人の書』から『カンタベリ物語』に至るチョーサー文学の発展は、一口に言って、伝統的な宮廷風恋愛の讃歌から次第に、喜劇的精神によるリアリスティックな人間探究に至る発展として把握することの出来るものである。ブラッシュ夫人の描写とアリスーンのそれとを比較して見れば、そこに女性観の明白な相違が窺われるであろう。

註

1 W. Clemen, *Chaucer's Early Poetry* (trans. by C. A. M. Sym), pp. 54 ff.; D. S. Brewer, *op. cit.*, pp. 263 ff.

2 女性の「慈愛」の讚美は、宮廷風恋愛詩に見られるばかりではない。聖母マリア崇拜を主題とする宗教的抒情詩に無数の例を見ることが出来る。マリア崇拜と宮廷風恋愛の関連は屢々論及される問題であり、宗教的抒情詩と世俗的抒情詩（宮廷風恋愛詩）の、形式及び発想に於ける著しい近似性について詳論することは、中世女性観の解明に極めて重要なのであるが、これも紙面に余裕がなく別の機会を待たねばならぬ。

3 E. T. Donaldson の見解によれば、『粉屋の話』はハーレイ写本の抒情詩と語彙の上で多くの共通性を持っており、チョーサーは、喜劇的な意図からわざわざ旧套の詩風を用いたのではないかと想像される (D. S. Brewer, *op. cit.*, p. 267, n. 2)。